

十夜法要

十一月十四、十五日

比較的穏やかな天候のもと十夜法要が営まれました。大勢ご参詣頂きまして有難うございました。

雪吊り・雪囲い

十一月二十三日



各地区から二十名あまりの代表の方々にお集まり頂き、恒例の雪囲いと、雪吊りをさせて頂きました。おかげさまですっかり冬支度が整いました。お忙しい中、ほんとうにありがとうございました。

正高寺「ご子息」成婚

十一月二十八日

越前万歳や子安観音で有名な文室の正高寺さんの「ご子息」が結婚なさいました。

息子さんの一尋さんは福井新聞社勤務で、新郎のゆかりさんとは味真野小学校からのおさな



なじみとのこと。

結婚式は正高寺さんの本堂で大宝寺の住職が戒師を、副住職夫婦が仲人をつとめる中、仏式でおごそかに、かつ華やかにとり行われました。

写真は無事式を終えて正高寺の阿弥陀様の前でポーズをとるお二人です。また、正高寺さまは大宝寺のご開山存雄上人がお開きになった大宝寺と縁の深いお寺です。

お知らせ

カリンの実



宝物殿の北側にあるカリンの木に実がたわわに実っております。車などに一個入れておくだけでとても甘い

縁親

〒915-0823
福井県武生市本町 10-2
大寶寺
TEL/FAX (0778) 22-1682

「暖かいですね」という挨拶が交わされる今年の秋ですが、さすがに十二月に入ってから晩の寒さが身にしみてきました。皆さまはいかがお過ごしでしょうか。

先月、住職は軽度の脳梗塞で、また副住職は早期の肺ガンの摘出手術で入院し、ともに寺を留守にすることになりました。その間、皆様に多大なるご心配とご迷惑をおかけしましたことをお詫びすると同時に、皆様から頂きました暖かい励ましに心から御礼申しあげます。

おかげさまで住職は杖をつけて病院の中を歩くことがで

きる程度に、副住職の方は通常の寺務に差し支えのない程度に回復いたしました。さて、十一月には一年を締めくくる佛名会という法要を営みますので御案内申し上げます。

佛名会の最後には浄焚会という法要がございますが、この時にはご供養をした上でお焚きあげいたしますので戒名札・位牌札・軸など処分に困るものがございますたら寺までご持参ください。

大寶寺 佛名会ご案内

○ 十二月 十八日 (土)
午前九時半より

○ 十二月十九日 (日)
午前九時半より
浄焚会 午前十一時より

布教・回向師
敦賀市杉箸 養福寺
渡邊俊祐上人

良い香りがします。また、カリン酒などをつくることもできます。十二月中旬を過ぎると、実が傷んで例年、生ゴミとして捨てています。ご希望の方は遠慮なく持って行ってください。

除夜の鐘

十二月三十一日

大晦日には除夜の鐘をつきます。ご近所の方や知り合いの方々が毎年鐘をつきにこられます。鐘の下でたき火をしながら近況について話が弾みます。中にはご近所のお寺を巡って鐘つきをする人や、終わったあとそのまま総社へ初詣に出かける人もいます。本堂ではご本尊さまを拜んで頂くこともできますので、ぜひお出かけください。



ぼくらはみんな生きている
朝ご飯を炊いていると、目覚ましテレビのテーマソングが流れてくる。「手のひらを太陽にすかして見ればあー、真っ赤に燃える僕の血潮おー」覚えやすい歌詞とメロディに合せて思わず口ずさんでしまう。「ミミズだって、オケラだって、アメンボだって、みんな生きているんだ、友だちなんだあー」アンパンマンの作者、やなせたかし氏の創作であるこの歌のメッセーじは、子どもたちに命の尊さを教えることにあるのだろう。

でも、ちよつと待てよ。何かへんだ。ミミズ、オケラ、アメンボはともかく生きていこうというだけでゴキブリやシロアリあるいはウジムシと友だちになれるものだろうか。人間の一方的な思いこみは、ヤブ蚊とかゴキブリならばいざしらず、おおかたの野生生物にとってはありがた迷惑であろう。昨今の熊騒動、この歌との矛盾は幼児だっけ気がつきそうなのだが、そのとき大人はどう答えればよいのか。

八月下旬、湯尾のお施餓鬼は、虫供養という法要で締めくくられる。無用な殺生はできるだけさけるべきであるが、人間は他の生き物を殺さずに生きていくことはできない。だからたとえ無意識にでも殺してしまった虫や、爬虫類に懺悔の気持ちとおかけさまで、という感謝の気持ちを虫供養という形で表す。



生きているのか、あ～
友だちなのか、あ～
重厚にしてまちがいのない本物の生命観に裏づけられているように思われる。

○佛名会について

『佛名経』には、「およそ一万三千もの佛・菩薩の名が列挙され、「もしここに

にある名を読み上げれば、平穏な日々を過ごすことができ、諸難から離れ、諸罪が消え、将来、悟りが得られる」と説かれています。佛名会は毎年歳末に多くの佛様や菩薩様の名をとえ、知らず知らずのうちに

犯したさまざまな罪を懺悔し、身心を清める法要です。

浄土宗では「佛名会」は十二月中に一日ないし三日、過去・現在・未来の三世の諸佛三千のみ名を称え、南無阿弥陀佛のお念佛をとえ、礼拝して罪深い自身を懺悔する法要になつていきます。

塔婆回向のお勧め

佛名会では各家先祖代々また先になくなられた方々のご供養を一霊、六百元でいたします。帳場にてお申込みください。なお、武生地区のお檀家さまには例年と同様、寺からお申込みのお願いにうかがいますのでよろしくお願い致します。



五重相伝の五重って何？

来年10月6日から11日にかけて浄土宗の伝統的法要である五重相伝が大宝寺でいとなまれます。この法要はお念仏の相続を次のように五回に分けて説明することから五重相伝とよばれます。

- 初重 法然上人作といわれる『往生記』によって、念仏を申して往生する人の機根について述べる。
- 二重 浄土宗第二祖聖光上人御作の『末代念仏授手印』により五十五の法^{ほつすう}数をあげて浄土宗の安心、起行、作業、三種行儀等について述べる。
- 三重 『領解末代念仏授手印鈔』、略して『領解鈔』^{りょうげしやう}といい、浄土宗第三組の然阿記主禪師の御作で、前述の「授手印」を了解する。
- 四重 然阿記主禪師の御作『決答授手印疑問鈔』略して『決答鈔』といい、念仏信仰を続けているうちに起ってくるいろいろな疑問に対して明快な解答を与えている。
- 第五重 『往生論註』に説かれている口授心伝、または「十念伝」といわれる。これだけでは五重とまちがえるので、第五重と第をつける。

なんだか難しそうですが、実際には勸誡師と呼ばれるお坊さんが、やさしいことばで念仏の肝要を分かりやすく説明して下さいます。

ワンポイント仏事 ろうそくとお線香

月参りやお盆の棚経におうかがいしますと、よく、ろうそくを灯したほうがよいのか、線香は何本立てるのかという質問を受けます。ろうそくはお仏壇を明るくするということのほかには知恵の象徴でもあるので、できればつけた方がよいでしょう。

また、お線香は浄土宗では一本か三本立てます。三本の場合には仏、法、僧の三宝への供養という意味があります。お線香の火は直接つけるよりも、ろうそくから取るのがよいとされています。ろうそくの火を消すときは、ろうそく消

しを使うのがよいのですが、なければ、うちわや手で払って消します。息を吹きかけて消すことはよくありません。

また、おリンの中にマツチの燃えがらがたくさん入っているお宅をたまに見かけますが、お仏壇はご先祖や仏様のお住まいです、ちらかつた灰などを掃除してきれいに保つよう心がけましょう。



副住職 闘病記

肺ガン摘出手術を受けて

「(CTスキャンを受けて)よかったですねー。やっぱありました。」武生市文化センターでの集団検診の結果胸部の再検査を勧められて、中村病院で気がすすまないままに受診したCTスキャンのモニター画像上の白い斑点を示しながら外来担当の若い女性医師は元気に叫んだ。

9月初めのことである。

バトンを受け継いだおそれく三十前半であろうと思われる内科の男性医師は、輪切りにした胸部の画像を5ミリごとにとずらして見せながら「おそらく2センチ弱の早期のガンですね。」と、自信たっぷりに断言した。「大丈夫です。取れます。」と慰められても、私の心は若年のガンは進行が早いという不安でいっぱいになった。

その後、最新の診断装置と

呼ばれるPET、脳を調べるMRI、また患部を採取して直接的に調べる内視鏡検査などによって、転移はなさそうだと結論が明らかになるにつれて私の気持ちは落ち着いてきた。が、それは安心というよりはむしろ諦めと、言うほうが当たっていた。

肺の疾患を専門としているという主治医のH医師は、人間の肺は右側がみつ、左側は心臓があるので、ふたつに分かれています。あなたの場合は右側の一番下、すなわち下葉の上部に初期のガンがあると、詳しく説明してくれた。

さらに今後の転移を防ぐために右肺の下葉全体とそれに付随しているリンパ節を手術で切除することを勧められた。

全身麻酔の無意識状態のまま手術は主治医のH先生とその恩師である福井大学医学部のS先生の手で予定より早く2時間半で終了した。

翌日は上半身を起こすことすらままならない激痛に耐え

ながら医師の指示通り深呼吸と院内の歩行を心がけた。といつても瞬間的に浅い息をすることで精一杯、しかも、右腹の下部には血液の混じった体液を取り除くための管と、その先に繋がる小型電気ストープほどの大きさのけつこう重い器具を引きずりながらのことだった。

三日目には管とその器具が取り外され、傷口の痛みも和らいだので院内を歩き回った。一階から六階まで階段の上りを十数回繰り返すこともあった。当初は一階登るごとに呼吸を整える必要があったが、日を迫うにつれ、その必要はなくなっていた。

一人部屋なので他の患者を気にせずに朝夕、お念仏を唱えたり阿弥陀経や般若心経を声に出して読んだことも幸いしたのである。二、三週間後八日目に主治医から退院の許可がでた。

手術から一ヶ月が過ぎよう

以前の状態に戻った。科学の進歩は早期発見を可能にし、負担のより少ない手術を可能にしてくれた。また、経験豊富な医師に巡り会い、手厚い看護のもとに治療を受けることができたことは本当に幸運であり、またありがたいことであった。

今、切除した部分にできた空洞は残っている肺が膨らんで隙間を満たし、減少した肺活量を補ってくれているということだ。

人間の体とは何と不思議なものか。思いもよらない肺ガン摘出手術を通して、つくづく私は自分の力で生きていくのではなく、さまざまに支えられて生かされているのだ、ということを感じ知らされた。



